

特別座談会

日本人が 被災地から 学ぶべき 未来とは



大震災発生直後から、
実際に被災地に足を運んで復興を

支援してきた論客たちが

「JAPANISM」編集部に集結した。

はたして、被災地の惨状は
何を教えてくれるのか。

独自の視点で感じ取った現実と、
被災地から学ぶべき未来を語り合う。



西村 今日お集まりいただいた皆さん、自らが東日本

大震災の被災地に入つて活動なさつた方々です。ことに、荒谷さんは自衛隊の特殊作戦群で有事対応を実践していく経験を踏まえ、実際の被災地で何を感じたか、まず伺いたいですね。

荒谷 今回の事態で特徴的だったのは、自衛隊を派遣する際に、運用形態のビジョンがないままに「数」が指定されたことです。結果として約十万人が動いたわけです。が、多くの「遊兵」が生じてしましました。出動命令は出たけれど、具体的にやるべき内容を想定しての「数」

ではなかつたということです。

葛城 私は予備自衛官なので、地震が起きてすぐに意向確認の電話がありました。もちろんすぐにでも行く覚悟を決めて、仕事先にもキャンセルの可能性を伝えて待っていたんですが、その後はなしのつぶて。そういう意味では私たち予備自衛官も遊兵の一部だったと言えるかも知れません。即応予備自衛官の方は大勢募集されたようですが、志をもつて予備自衛官になつた人間としては、千年に一度といわれる大震災で運用されなければ、私たちは何のためにいるんだろうという気になつてしまします。

西村 山村さんはどうですか？

山村 私の場合、福島第一原発事故の避難圏内にある神社の支援を行きました。二十キロ圏内の中にある神社ではほとんど避難してらっしゃいましたが、二十キロぎりぎりのエリアでは、まだ頑張って残つてらっしゃる神社がある。神職の方は鎮守の森のお社を守る使命感で残っているのですが、「行政にも国にも置き忘れたようで情報も入つてこない」と嘆いてらしたのが印象的でした。自衛隊の指揮命令系統だけでなく、被災者への情報伝達機能もマヒしていたということでしょうね。

明治神宮武道場「至誠館」館長

荒谷 卓（あらや たかし）

1959年秋田県生まれ。大館鳳鳴高校、東京理科大学を卒業後、陸上自衛隊に入隊。福岡19普通科連隊、第一空挺団などを経てドイツ連邦軍指揮大学、米国特殊作戦学校に留学。さらに編成準備隊長を経て自衛隊初の本格的な特殊部隊、特殊作戦群初代群長となり、2008年に退官。1等陸佐。2009年から明治神宮武道場「至誠館」館長に就任し現在に至る。



参議院議員

宇都 隆史 (うと たかし)

1974年鹿児島県生まれ。防衛大学校航空宇宙学科卒業後、航空自衛隊に入隊。2007年に退官し松下政経塾に入塾。2009年の参議院議員選挙にて自民党比例区より立候補して初当選。参議院では外交防衛委員会委員などを務める。

長さんの主導で地元産材を使つた木造の復興住宅の提供が始まっています。

葛城 それはまた素速いですね。

西村 もともと林業の町で、地元の木材を活用した移住者用の町営住宅の建設を震災以前から始めていたらしいです。だから、震災直後には住宅が完成して、もう住んでいらっしゃる被災者の方も「木の家で快適です」とおっしゃってました。もともと地域にある「力」を活用する試みは、復興にとつてとても大事なことだと感じます。

宇都 また、私自身が元自衛官として感じたのが、自衛隊がやるべき作業と、警察や消防、あるいは民間に任せられる部分が混乱していたことです。たとえば、瓦礫の処理はご遺体を搜索しながら自衛隊がやるのが効率がいい。ある程度処理が進めば、民間に委譲して重機を入れて作業していくのがいいでしょう。ところが、現状では流通がストップした原発の計画的避難地域で、自衛官が個別訪問してご用聞きのような作業をしています。これは、はたして本当に自衛隊がやるべき仕事なのかという疑問を感じました。

荒谷 今の宇都議員のご指摘は重要なポイントです。住民の安全確保は本来、自治体の責任です。ところが、地方の行政機関には非常時に安全を確保する要員を常に抱いておくべきでありますね。

宇都 私は宮城県の女川や石巻、松島基地などに行きました。現地の指揮官から遊兵の話を伺いました。災害派遣された自衛官は、とても士気が高い。でも、被災地で実際に命令される仕事の内容で自分たちが遊兵化してしまっていることに気付くと士気に影響する。現場の指揮官の方々は、それを大変気にしていました。

西村 復興のために使うべき「力」が使いこなせていないのが現状ですね。

宇都 また、私自身が元自衛官として感じたのが、自衛隊がやるべき作業と、警察や消防、あるいは民間に任せられる部分が混乱していたことです。たとえば、瓦礫の処理はご遺体を搜索しながら自衛隊がやるのが効率がいい。ある程度処理が進めば、民間に委譲して重機を入れて作業していくのがいいでしょう。ところが、現状では流通がストップした原発の計画的避難地域で、自衛官が個別訪問してご用聞きのような作業をしています。これは、はたして本当に自衛隊がやるべき仕事なのかという疑問を感じました。

荒谷 今の宇都議員のご指摘は重要なポイントです。住民の安全確保は本来、自治体の責任です。ところが、地方の行政機関には非常時に安全を確保する要員を常に抱いておくべきでありますね。

山村 まさに「備えあれば憂いなし」ですね。

葛城 本当に。林業も地元の雇用も活性化できて、被災者も助かるしいこと尽くめの気がしますね。

山村 実際、こうした非常事態で自治体首長のリーダーシップは重要です。先ほど話した神社は福島県のいわき市に隣接しています。いわき市はとても広大な市で、自衛隊が瓦礫の処理などをしたあとに、救援物資の配分は自治体が受け持つことになっていた。ところが、いわき市では配達できないから被災者に「自分で取りに来い」ということになってしまったんです。ガソリンもなくて、取りに行く方法がない被災者は少なくありません。戦後、人権が重視される風潮が強まりましたが、本当に大切なのは人を思いやる気持ちです。実際、災害派遣された自衛官は思いやりの心で動いていました。権利だけではなく、「思いやり」のある制度を義務化して、救援体制がスマートに動く態勢を整備しておかないと、日本は機能しなくなるという危機感がありますよ。

西村 災害だけでなく、外国からの侵略のケースでも同様ですね。

宇都 批判するわけではないのですが、実際に復興に当たって自治体の首長さんの力の差は如実に現れているとえておくほどの財政的な余裕はありません。仮に、テロや武力攻撃の事態であれば、現状の自衛隊の勢力では、対処が精一杯で、今回のような住民保護活動をする余裕はありません。そう考えると、住民が主体的に安全を確保するような仕組みを構築しておかなければいけないのだと思います。ところが、今の政府には、国民は保護されるものであって、自らが保護する側に回るという観点がありません。

西村 たとえば、イスラエル政府は民間防衛に力を入れて国民への啓蒙活動もしっかりとやっています。ところが、日本の国民保護法からは、国民自らが国や住民を守るという視点が欠落していますね。

荒谷 国民自らが安全確保に力を發揮する仕組みは、国民に理不尽な負担を強いるものではありません。天災でも武力攻撃でも、被災者は一次的に仕事を失うことになる。そのような中で、身体は健全である方に、自らの地域の復興や住民保護に従事してもらい、国がちゃんと対価をお支払いすれば日銭も稼げます。

葛城 私自身は先日までTBSラジオで『ちょっと森林のはなし』という番組を持っていたこともあって林業とご縁があるのでですが、岩手県の住田町ではもうすでに町



作家・ジャーナリスト

山村明義 (やまむら あきよし)

1960(昭和35)年 熊本県生まれ 政治・外交・経済分野のジャーナリストとして硬派テーマを執筆しながら、日本人の基本的な伝統精神である神社神道を全国各地でノンフィクション作家として取材を敢行。これまでインタビューなど会談を行った神社神職の知己は400人を超え、9月には新潮社より「日本人と神道の力」(仮)を発売予定である。

いうことも聞いています。行政機関のダメージにも差があるでしょうが、就任して間もない首長さんは「この案件はどの省庁に投げればいいか」という具体的な対処法がわからないといったことのようです。

西村 なるほど、リーダーシップに関する一連のお話しさは、政府の統合対策本部が機能しなかつたこととともに重なりますね。

葛城 チャンネル桜の取材でお会いした飯館村の菅野村長は素晴らしい方でした。自然と融和した村づくりを進めてらして、失礼ながら「原発で潤っていたんですか?」

と伺つたら、三十キロ離れた町にほとんど恩恵はなかつたそうです。それなのに、全村避難になつてしまつた。「ふざけるなと言いたいところですが、「ないものねだりでなく、あるもの探し」の村づくりを」と、穏やかな笑顔で話してくださいました。

西村 お気持ちは痛いほどわかります。

葛城 実際に放射線量を計測しながら村内を移動してみると、本当に場所によつて全く数値は違います。例えば、特別養護老人ホームに入つてお年寄りを無理矢理避難させるより、ほとんどの時間を過ごすホームの屋内の数値が安全ならば、そこでもう余生を過ごしていただけばいいのではないか、ということですね。場所や状況に応じたきめ細かな対応は地元の首長さんしかできません。それなのに、一方的に、何もかも一緒ににして全村避難が決定されてしまいました。

宇都 原発事故の避難については、地元と中央政府との温度差が大きいと感じます。東京にいると「早く安全なところに避難させてあげろ」という世論ばかりが気になつてしまつ。でも、実際に避難する人にとっては、住み慣れたコミュニティを捨てるという重大なことですからね。

西村 大震災への政府の対応は典型的ですね。

荒谷 でも、現場ではいろんな問題が複合的に起きていて、事態を解決するためには、コミュニティというパッケージに視点を置いて発想しないと、物事は進まないということです。日本は、先の大戦でも現場を見ない中央の参謀が作戦を立案することで失敗しています。中央は基本となるコンセプトを立てて、あとは現場に権限を与えることが重要ですね。今回も被災地域が非常に広いので、作戦としては現場への権限委譲が不可欠でしょう。ところが、復興会議などの様子を見ていても、結局は上意下達の構造に陥つているようになります。

宇都 まさに「現場に任せてくれ」という声は、各地の識者から上がっていますね。復興計画にしても、改めて東京のような町を作るより、地元の自然と融和した新しいカタチを模索するきっかけにしなければいけません。成長戦略だけでやつていける時代ではなくなっていますからね。

西村 まったくその通りです。復興に向けて、支那へ材木を買付に行く輩がいて、その利権を当てにした政治家が暗躍しているという噂も耳にする。情けない話です。また、荒谷さんが指摘した指揮命令系統の不具合は、原

葛城 飯館村ではもともと「丁寧に、大切に、真心を込めて」を意味する方言である「までい」をスローガンに村づくりを進めていました。地元材で学校を作つて、半農半X型のライフスタイルを提倡したり、間伐材のエネルギー利用を進めたり。つまり「までの力」で限界集落を元気集落に、なにもない里山を資源の山に変えていこうという試みが定着しつつあつたんです。それが、今回のことでの事故でぶち壊しです。

山村 南相馬市の桜井市長も元酪農家ですね。ご自分で農業をやってらして、地に足の着いた対応をされている。

葛城 飯館村の菅野村長も元酪農家ですね。

山村 一方で、お名前を出して恐縮ですが、岩手県の達増知事は、小沢さんの様子を窺いながら動けないと印象でした。

荒谷 首長のリーダーシップが教えてくれるのは、国として問題解決のアプローチをどう考えるかということの重要さです。中央の役人は、津波は津波、原発は原発と、役所の所掌業務に合わせて縋張り的に考えようとしています。だからヘッドクオーターが乱立して、全体を見ずに自分の正面だけの処理をしようとする。

発事故への対応で顕著だったようを感じます。

荒谷 ああ、海江田さんや菅さんが電車や消防を怒鳴り散らしたという件ですね。当時の詳細な状況がわからぬに、非常事態の現場では一分一秒を争う対応をしなければいけないのです。いちいち中央の許可を求めるなくて、現場で緊急対応ができる態勢を取る必要があるので、それができていないことです。危機管理に対する基本的なセンスが欠如しているとしか言いようがありません。これは、現在の日本の行政が計画立案に偏重し過ぎた証しではないでしょうか。行政の使命は、政治が目的としたことを実際に達成することです。結果の確認、評価、改善処置をあまりにも軽視してきたことの悲劇です。

山村 とくに原発問題では、強くそう感じます。福島第一原発の事故処理も民間会社の東電にやらせて、国がやっているのは行政指導。行政指導で消防車を出動させたり、浜岡原発まで止めてしまつた。法的な根拠が希薄なまま行政指導でやるのはどうということか。戦後の日本は政治と行政の関係をきつちりと考えてこなかつた。つまり「有事はない」と考えていることの証左ではないかと

思います。

宇都 たとえば軍事組織であれば明確なはずの指揮系統が、今の日本政府には見えません。自衛隊員が被災地で思い切り働けるのは、何かあれば上官が責任をとつてくれるという信頼関係があるからです。ところが、原発事故の統合対策本部にさえも法的根拠はあるでない中で、首相補佐官が指示を出して動いてるのが不気味です。

西村 大東亜戦争の参謀本部が犯した失敗を繰り返そうとしているようです。硫黄島に赴任した陸軍の栗林中将が海軍機動部隊や航空隊が壊滅的な損害を受けていたことを知らなかつたように、陸軍と海軍で情報の共有化さえできていません。兵が優秀だからもつてている状況でした。

荒谷 三号機が水素爆発した時に、現場の自衛官には三号機が爆発する可能性すら知られていませんでした。

山村 本当に、大東亜戦争と全く同じ状況といえるのではないでしようか。

宇都 記者会見は大本営発表のようです。

山村 メルトダウンの認め方や避難指示。情報の出し方としては最悪です。

宇都 大戦で敗色濃厚になつた頃、陸軍参謀本部が「も

う戦争を止めるべき」と提言しようとしたものの、ここで戦争を止めたら内閣が倒れるという政局判断があつたとも聞きます。今、まさにそうですね。政治的空白を作るのはまずいという論理が働きすぎていると感じます。

今後の日本はどうあるべきか

とも伺いたいと思うのですが。

西村 さて、日本が危機的状況であることは疑いようもありません。被災地の現場でさまざまな活動をなさつたみなさんの視点で、今後、何をどうするべきかというこ

西村 素晴らしい試みですね。

俳優・キャスター

葛城奈海 (かつらぎ なみ)

東京大学農学部卒業後、女優としてテレビドラマ、CFなどに出演。自然環境問題への取り組みをライブワークに、自身も森づくり、米づくりの活動に参加。日本文化チャンネル桜『防人の道 今日の自衛隊』に出演中。『やおよろずの森』(民間団体)代表。予備役ブルーリボンの会広報部会長。



たいと思います。

西村 実際、震災後の二ヶ月で多くの国民は「利己的な競争社会の弱点」や「日本で頼れるものはやはり自衛隊なのだ」と気付いているのではないかと思います。もしかすると、東日本大震災こそが、日本の戦後を終焉させるきっかけになるかも知れません。

山村 本当に、個人の権利を声高に訴えるだけに社会は限界で、崩壊しています。被災者の中で動ける人は、誰かが何かをしてくれるのを待つのはなく、自分がみんなのために何ができるか考えて動いていらっしゃいます。もう、無言で立ち上がってるんですね。

葛城 ああ、それは私も被災地で強く感じました。

荒谷 先ほどの話を少し補足すると、被災者の方たちは何もしないで義捐金を受け取つたり救援物資の食事をもらうのを心苦しくも感じてらっしゃいますね。だから、お返しにせめて労働で返したいという思いがあるんです。原発三十キロ圏内で物資を配つて歩いた時に、食べ物をお渡ししたおばあちゃんが「お金はもうこれしかなくて」と手元を私に渡そうとなさつたのが印象的でした。もちろん「大事なお金だからいただけません」とお返ししましたが。

西村 震災直後、南三陸町の役場で避難勧告が出る中、

防災無線で住民に避難を呼びかけ続けて命を落とした遠藤未希さんのニュースが流れました。遠藤さんはまだ二十四歳でした。戦後教育を受けてきた若い人の中にも、利他に命を投げ出せる日本人の魂が息づいていることに痛切な感銘を受けました。

荒谷 それなのに、マスメディアでは未だに利己的な利益や快楽を正当化する浮ついた情報が目立ちます。宇都 国民意識を誘導しようとする意図を感じますね。西村 東電社長の土下座報道は典型的ですね。あの土下座は、まさにマスメディアに撮らせて国民感情の反発を和らげるこれが目的だったとしか思えない。

山村 深刻なのは、個人の権利に偏重したことを行行政がやると大変なコストがかかるということです。今回の原発事故も、これから賠償や補償の問題が深刻になってしまます。例えば精神的な被害まで補償するとなると、どこまでが賠償されるべき個人の権利かという訴訟がたくさん起きて、最終的に必要な金額は百兆円規模になってしまうかも知れません。そのコストは、結局われわれの子どもたちや子孫が背負うことになります。

荒谷 先日テレビで「地震の後、子どもが怖がってエレ

ベーターに乗れなくなつた。メンタルケアが必要だ」という話題を伝えていました。詳細なことは知りませんが、はたして、本当にそんなケアが必要でしょうか。人間は失敗やストレスから学んで成長していくます。ところが、周囲が大騒ぎしてメンタルケアを叫んでいると、子どもはリスクから体験的に学ぶことをせず、どんどん弱つちよろい人間になってしまいかねない。

西村 正義漢ぶつたきれいごとだけでは、いい世の中は実現できないということですね。

葛城 私は、津波に襲われた宮城県山元町の現場に初め

て立つたとき「神の手我を撃てり」という旧約聖書の言葉が頭に浮かんできました。石原さんの「天罰」発言にとても近い感覚だと思うのですが、崩壊した町を見ながら「ああ、昔の日本人なら、これは祟りだと畏れるんだろう」と感じました。

西村 その気持ち理解できます。

葛城 地震も津波も、やおよろずの神様がなさつたことです。大変な犠牲者と被害が出てしまいましたが、日本人が猛省を促されたのだから、今までのあり方を根本的に変えなくてはいけないのだろうと思いました。首都圈でも計画停電や節電がありましたけど、以前より暗くなつた街や部屋で「別にこれでいいんじゃないか」と感じた人は少なくないはずです。今までヒステリックに明るいことや速いこと、便利なことは正しくて、国の豊かさの象徴だという価値観が戦後ずっと続いてきましたが、本来、効率至上主義は日本人らしくないことではないのか。ここで一度チャラにして、新しい日本を再構築していきたいと、強く思いました。

西村 「もつたいない」の精神ですね。

葛城 そうですね。岩手に私の祖父がいたのですが、小



本誌編集長の西村幸祐

さい頃遊びに行つた時、雪毬いを作る手伝いをしようとしたことがあるんです。すると、祖父の道具箱の中にある釘が、ものの見事に全て茶色く錆びていた。それを見て、この釘はおじいちゃんと一緒に生きてきて、何度も打たれたり抜かれたりしてきたんだなあと感じました。使えるものを最後まで上手に使い切るのは、本来日本文化がもつっていた美德です。もう一度、そういう価値観を思い出したいですね。

西村 まさに、その通りですね。さて、宇都さんは今後のあるべき日本の姿についてどう思われますか。

宇都 もう起こつてしまつた震災や事故には、毅然として立ち向かうしかありません。ただ、今回の出来事をきっかけに、前進すべきだと考えるポイントが三点あります。まずは、自衛隊についてですね。今回、十万人の災害派遣があつたわけですが、実は、残りの十四万で国を守らなければいけないという状況がシビアなのです。つまり、たとえば震災と同時に武力攻撃があつたなら、二十四万人態勢では国を守りきれません。自衛隊の態勢について、改めて議論するきっかけにしなければいけないと思っています。原発の安全についても、今までの法律では、原発が武力攻撃されても自衛隊が武器を持って入

ることはできないことになつていています。携行の手榴弾やミサイルで攻撃されても原子炉は大丈夫という論理だつたようですが、電源を落とされたら終わりだということが明らかになりました。この国の安全を守るためにいろんな仕組みを、今一度見直して一歩進める必要があると感じています。

西村 当然のご指摘ですね。でも、今のが政府ではその当たり前のことがなかなか行われない苛立ちを感じます。

宇都 ふたつ目は、農業の再構築の問題です。現地に行つて感じたのは、東北にはやはり広大な農地があるといふことです。今、沿岸の農地は津波に襲われて大変なことになつていて、お年寄りの中には「もう農業はやらなければいい」という方も少なくありませんでした。今まで、日本で農地の大集約化が進まなかつたのは先祖から受け継いだ農地を手放したがらない人が多かつたからです。この機会に、たとえば国が農地を買い上げて公的に所有して、農業に従事する人はその土地を活用して対価を得るようなモデルケースを構築できるのではないかと感じました。小資本、小規模な農業で家族が暮らしていくための収入を得るのは難しいのが現実です。日本全体の農業再興のために、考え方直す機会にするべきではないかということ

ですね。

西村 なるほど。

宇都 三つ目のポイントが、思想的な防衛面と社会保障の問題です。先日、行政主催の合同慰靈祭を仏事としてやろうとしたら、政教分離に抵触するからできないという報道がありました。でも、肉親を失った心の穴を埋めるために、宗教的な拠り所は大切です。カルト教団はそういう心が弱っている人をターゲットにしてはびこるそうです。

西村 災害以外にも人を襲う不幸はありますからね。

宇都 そうですね。地域の共同体と宗教の関係を、もう一度考え直す必要があるのでないかと思います。たとえばアメリカであれば「年越し派遣村」のような社会保障の部分は、教会が担っています。でも、日本ではそれを全て行政が膨大なコストをかけてやっています。だから、お金がいくらあつても足りません。日本にはもともと天皇家を中心とした神社や、お寺のネットワークが広がっています。数は少ないですが、教会もあります。行政主導ではなく、民間の力でこうした場所を有機的に活用できる仕組みがあればいいのになと思っているところです。

葛城 今回の地震でも、神社やお寺に避難して助かつた方も多いかったようですね。

山村 東京でも、神田明神の境内には近くにITビルから避難してきた人がいっぱいでした。荒谷さんがいらっしゃる明治神宮も大変だつたんじゃないですか？

荒谷 大混乱でした。うちの道場にも百三十名ほどの方が泊りましたし。

山村 そもそも、日本の集落では神社が共同体の中心にありますからね。何かあると、神社に集まるのは日本人ならではの感性ですね。

荒谷 仏教やキリスト教も亡くなつた方の鎮魂はしますが、神道では鎮魂した人たちが神になつて子孫や地域をお守りくださるというのが特徴的なところです。今回、震災で命を落とされた数万人の魂を、神としてお祀りしていけば、より前向きな未来に挑戦していくうにも思っています。

西村 本当にそうですね。我々には犠牲者の魂を未来に繋げていく責任があると痛感します。今日は、本当に有意義な議論と提言ができました。みなさんはこれからも被災地に足を運ばれるでしょうが、気をつけて活動なさってください。ありがとうございました。